プロ野球選手の活躍度と経歴の研究
Research of professional baseball player's activity level and career

1K09B124　　竹池　幸祐
指導教員　主査 平田竹男 先生　　副査 中村好男 先生

【背景】

毎年100人近くの選手が指名される新人選手選択会議は、今秋、例年同様または、それ以上の盛り上がりを見せた。様々な経歴の選手たちがプロ野球界を支え、入団してきている。その中で、一般的に「社会人卒＝即戦力」「高校卒＝将来性」といった表現をされることがしばしばあるが、実際にこの言葉は正しいと言えるのだろうか。

【目的】

本研究では、選手の入団後の活躍度合いと経歴の現状を調査し、選手、球団、両者のドラフト戦略の考察を行うことを目的とする。

【手法】

まず、選手の活躍度調査を行う。野球についての客観的・統計的な評価をするために、セイバーメトリクスという指標を本研究で扱う。本研究では、セイバーメトリクスの中から投手は RSAA、打者は OPS と TA という指標を評価に用いる。対象選手は、高校卒、高校～社会人卒、大学卒、高校～大学～社会人卒、その他の5つの経歴出身選手のうち、投手は、規定投球回数、野手は、規定打席を満たしている選手とする。また、調査期間は、投手、野手共に東北楽天ゴールデンイーグルスの新規参入した2005年から統一球導入前年の2010年までの6シーズンとする。但し、同一の選手が6シーズンのうち複数回規定投球回数または、規定打席を満たした場合でも、複数名分の成績としてカウントすることとする。さらに、規定投球回数、規定打席を満たした選手の人数も同様に5つの経歴に分類する。ここでは、同一の選手が6シーズンのうち複数回規定投球回数または、規定打席を満たした選手がいる場合、1人の選手として扱うこととする。

続いて、選手の経歴調査を行う。2005年から2010年までの間に一度でもプロ野球に在籍した日本人選手の経歴も同様に5つに分類し、その割合を調査する。さらに、投手、野手それぞれの経歴の内訳も調査する。

最後に、経歴ごとの活躍人数と割合調査を行う。選手の活躍度調査で得られた規定投球回数と規定打席を満たす選手の経歴と選手の経歴調査で得られた対象期間のプロ野球選手の経歴ごとの人数からそれぞれの経歴がどれだけの割合で規定投球回数と規定打席を満たす選手を生み出しているのかを明らかにする。また、経歴ごとの規定投球回数と規定打席到達者それぞれの割合も調査する。

【結果】

活躍度に関して、投手の活躍を示す RSAA は高校卒＋14．3、高校～社会人卒＋14．7、大学卒＋10．2、高校～大学～社会人卒＋6．3と算出された。また、野手の活躍を示す OPS と TA は、高い順に高校～社会人卒、大学卒、高校卒、高校～大学～社会人卒となった。投手、野手共にその他は、規定投球回数、規定打席を満たさなかった。

2005年から2010年の6シーズンにおいて NPB に一度でも所属した選手は高校卒530名で全体の43．6％、高校～社会人卒122名で全体の10．0％、大学卒365名で全体の30．0％、高校～大学～社会人卒157名で全体の12．9％、その他は41名で全体の3．4％という結果が得られた。

【考察】

球団側としては、才能もあり、社会人で経験も積んだ選手は、トップクラスの選手としてリストアップすべきだろう。現在の球界には、高校～社会人卒の選手は少ないが、新たな経歴の流れとして各球団には、高校～社会人卒選手を見逃さないよう NPB と社会人チームとのパイプを構築していくことが必要であろう。

一方、選手は、目標によって提言は変わってくるが、例えば、高校～大学～社会人卒、その他はあまり活躍を望めないため、仮に高校～大学と進むもその間にドラフト指名がかからなければ、その後の人生を考えて、プロへの道を諦めるのもひとつである。

【結論】

本研究では、入団後実際に活躍しているのは、どの経歴であるか、また、経歴の現状を調査することで、選手、球団、両者のドラフト戦略の考察を行うことを目的として研究を行った。調査の結果、成績を最も残している経歴は、高校～社会人卒であるということが明らかになった。一方で、高校～大学～社会人卒が最も低い成績であることも明らかになった。また、高校卒は、野手よりも投手の方が成績を残していることも示唆された。このような活躍度合いに対して、高校～社会人卒の選手が現状としてプロ野球界には最も少ないことも明らかとなった。このような点から、私はプロ野球界の発展を危惧し、球団への提言を行った。高校～社会人卒が最も活躍すると見込め、次いで投手は高校卒、野手は大学卒をドラフトで獲得すべきと提言した。もちろん、経歴問わずスター選手を獲得した方が良いのは当然だが、本研究がプロ野球界の選手獲得戦略に一石を投じられれば幸いである。そして、よりレベルの高いプロ野球界へ発展していくことを期待する。